

偏愛彩色ヴェルドル特典

『寵愛酩酊フィロリプス・アフターストーリー』

夢を見ている、と、夢の中の私はそう確信した。

目の前に広がるのは、大学時代、飽きるほど眺めた図書館前。等間隔で置かれたベンチの一つに、本を手にした一組の男女が座っている。

女の方は私だった。自分の過去をこうして客観的に眺められるものなのかと、夢の中で私は不思議と感心してしまった。

そして男の方は……樟木成士(たびきせいじ)くん。図書館でよく見かける人だと思って、とある講義の終わりに、資料道具の片付けがてら私から声をかけた。そこから交友が始まり、私たちはああして待ち合わせをして、お互いのおすすめの本や作家について語り合った。

それは私にとって、今でも心に残っているほど楽しい時間だった。

好きなものについて一緒に語り合える楽しさはもちろん、彼の、読者というよりは作家のような目線で物語の解釈を語るその様子に、いつだって驚かされ、そして時間を忘れるほどに聞き惚れていた。

正直に言うと、あの頃の私は、たぶんすでに成士くんが好きだったのだと思う。



恋愛経験どころか人付き合い自体たいして豊富ではない私は当時、自分の成士くんへの行為を男女の友情ぐらいに捉えていた節がある。

でも今思えば、彼ともっと一緒にいたい、もっと話したい、と感じる程に、成士くんへ確かな恋心を抱いていたのだと気付いた。

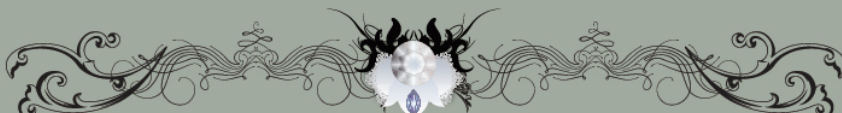
だから、突然……本当に突然、成士くんがいなくなってしまったことが辛かった。

最初は体調不良からのお休みだと思った。体調を案ずる連絡に返信が来ないことも、それぐらい辛い症状なのだと思っていた。

でも、あまりにも長いこと大学で成士くんの姿を見ることが無くなり、それどころか音信不通状態が続いたので、同じ講義の先生にそれとなく事情を訊いたら、理由までは窺えなかったものの、彼が退学したことだけは教えてもらった。

本当にあまりにも突然のこと……きつと彼には彼なりの事情があるのだろうとは思いつつも、ぽっかりと心に穴が空いたような感覚に陥った。

その反動なのか、私は、とくに好きな作家である椿先生の作品にのめり込むようになる。不思議と、現実逃避するような気持ちで椿先生の本を読むと、作品の内容やキャラの感情、ストーリーの構成が、昔以上に心に染み渡った。





そして私は、椿先生の最新作にホストキャラが登場したこともあり、そういった店に通っている友人に連れられ、とあるホストクラブへと足を運ぶまでになるのだが……

図書館前のベンチで、成土くんと楽しそうに語り合っている私は、いずれそんなことになるなど微塵も思い描いていない。

事実は小説より奇なりと言うように、この楽しかった記憶から、まさかあんな現実へと繋がることになるなんて……現在の私自身も、予想だにしていなかった。

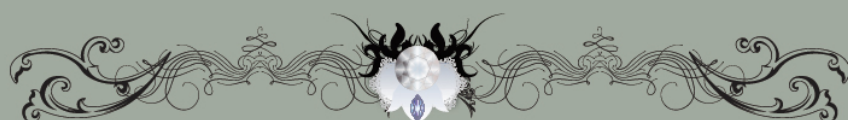
だから、夢の中の私は笑っている。

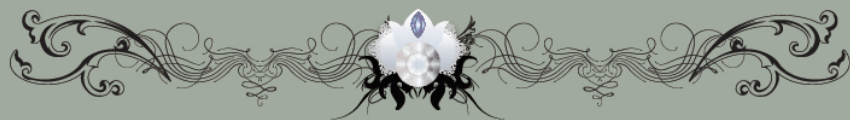
成土くんも、楽しそうに喋っている。

幸せな夢だった。

幸せで……だからこそ、切なくもある夢だった。

「……ああ、起こしちゃった？」





まどろみの中、寄り添うように聞こえてきた成土くんの声。

やや気だるい感覚のまま目を開ければ、隣に横たわった成土くんが私の頭を優しく撫でていた。

乱れたシーツで形成されたベッドの上。そして成土くんの一糸まとわぬ上半身が視界に入り、私は彼とセックスした後、気絶するように眠ったことを思い出した。

私は、ぼんやりとした意識のまま、成土くんの顔を見つめる。

彼は自身の変化を感じていないようだったが、私からすれば、大学時代の彼から大きく変化していると思った。

それは別に、髪の色だとか着ている衣服だとか、そういった類のことだけを言っているのではない。

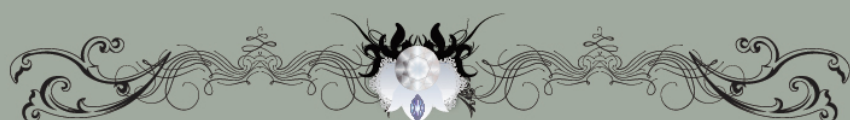
何て言えばいいのだろう……しいて言うなら【目】が違う。

大学時代の彼は、傍に居ても遠い何処かを眺めているような【目】をしていた。けど今の彼は、何もかもから解放されたかのような、それでいて何かを捕らえ囚われているような……そんな【目】をしている。

もしかしたら彼は、自分自身の『物語』を捕らえ、そして囚われているのだろうか。

「……どうしたの、そんなに俺のこと見つめて」

私の頭を撫でていた彼の大きな手が、その言葉と同時に私の頬を滑り、そして首元へと移



る。

猫を愛撫するように私の喉元を擦りながら、彼の瞳はうつとりと細まった。

「ああ……いつだって君が俺の傍にいてくれるだなんて夢のようだよ。何度も何度も思い描いた俺の夢が、ようやくこうして手に入ったんだな、つて……嬉しくて、嬉しくて嬉しくて、頭がどうにかなりそうだ」

彼なりの冗談なのか、それとも本気でそう思っているのか。

どちらにせよ成士くんは、世間一般的に見れば常軌を逸している側なのだと私もわかっている。

わかっている……けれど、それでも彼を突き放すことができず、今もこうして彼から渡された合い鍵を使い、彼の連絡がある度にこの部屋へと足を運ぶ私がいた。

何故なら、私は……

「ねえ、またシたいな」

子供のように無邪気な声音。

言われたその意味を理解した時にはもう、私は彼に組み敷かれていた。

目覚める前に、私の体の隅々を犯し尽くしたというのに、彼はまだ私を求めようとする。

「ま、待って成士く……んっ」

制止の言葉を封じるように、彼から濃厚なキスを受ける。

「んう、うつ……は、んっ……」

彼の舌が、私の口内を掻き回す。

酸素を求めて顔を背けようとすれば、それを許さないように、後頭部に手を添えられて身動きを取れなくさせられた。

「せい、じ……んっ、あ、成士く……んっ、んう」

「はあ……舌絡める度にビクビク体震えさせて、ホント可愛いね……。さっき抱いたから、もう指じゃなくって俺のモノ、ほしいでしょ？」

彼の指先が私の腹部をなぞり、先程の情事の痕跡を残した秘部へと辿り着く。恥ずかしくて閉じた私の太ももの付け根を、誘うように彼は指先で撫でた。

「ほら、いつものおねだりの時間だよ？ 教えた通りにできるよね？」

「……っ」

言外に含まれる脅迫。それは、彼がいつも使う手だ。

彼は、私を手放さない為なら何でもする。私はそれを、すでに身をもって知ってしまったっている。

だから私は仰向けのまま、ゆっくりとM字開脚の体勢になり、彼を見上げた。

「成士、くん……」

ドクドクと、自分の心臓が激しく脈打っているのがわかる。



不安と恐れ……そしてその中に混じる、言い逃れできない快樂への期待。
常軌を逸している彼を、しかし本気で拒絶できないその理由。

それは……

椿先生の……成土くんの紡ぐ『物語』の一部になれるその喜びを、私は知ってしまったからだ。

「おねが、い……します。成土くんのモノで……私の中、たくさん愛して、それで……いっぱい……いっぱい種付けして下さい……っ」

「……うん。よくできました」

とろけるような甘い声。

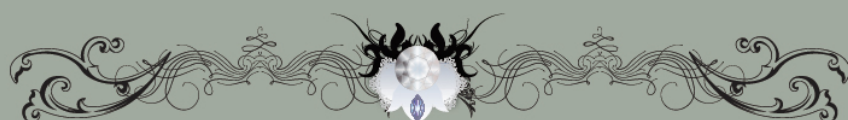
その声に身を浸す暇も無く、一気に最奥まで彼のモノが突き入れられる。

「ひっ……あ……」

突然の衝撃と快樂に、パチパチと脳内が弾けた。

のけぞりながらガタガタと震える私の腰を掴み、彼は容赦なくピストン運動を開始する。

「あっ、あ、あああ！ 激しっ……ま、待つ、あっ、あんっ！ 成土く、あ、あああっ、奥っ、奥にっ



……ひ、ひいいっ！」

「好きでしょ、子宮まで響くぐらい強く突かれるの。その証拠に君の中、嬉しい嬉しいって俺のモノを締め付けてるよ？　ねえ、いつも言ってるよね？　俺に嘘ついちゃダメだ、って。君は、気持ちいいのにちゃんと気持ちいいって言えない悪いヒロインなのかな……？」

部屋中に水音が響き渡るほど激しく攻め立てられながら、それでも冷ややかな彼の声音を耳に入れ、私は必死に声を上げる。

「違っ、きもち、いっ……気持ちいいですっ……あ、あんっ、や……気持ち、良くてえっ……あ、あっ、おかしく、なっちゃ……ひあっ、あ！」

「あー……可愛い、ホント可愛いなあ。何回抱いても愛しさが増すばかりだよ。大好き、大好き、大好き……っ」

「おっ、ん、んうう！　おぐっ、お、奥にっ……種付け、いっぱい、あっ、ああ！　くださ、いい……いっぱい、種付け、ほしいのお……っ」

これまで受けた騷の成果か、私は恥も外聞も捨てて、ただ快樂のままに彼の望む言葉を口にしていた。

彼は、微笑む。

大学時代とは全く違う笑顔を、成土くんは見せる。

「ふふっ、ちゃんと追加のおねだりまでできて、偉い偉い。イイコだったから今日もアフターピ

ルあげようね」

腰は激しく動かす癖に、喜びのままする口付けは宝物を扱うように優しい。

デイープキスでクチュクチュと口内を愛撫されながら、彼のピストンはどんどん早くなっていく。

「ふっ、んう、ぐ、んう、んーッ！」

キスが好きなのか、彼は事あるごとにキスを繰り返すし、射精する時も必ずキスをする。だから今日も私は、彼のキスと精液を同時に与えられた。

「んっ、うううううううう！」

彼が最奥で射精するのと同じタイミングで、私もまた、ビクンツと体を跳ねさせ絶頂を迎えてしまう。

最初はこのイキ方をしていなかったのに……今ではもう、体はすっかり彼に従順で、彼と共に絶頂を迎えるようになっていた。

成土くんは、そんな私を誰よりも最前列で味わい、そして喜んでいる。

「これからも、もっともっと、俺たちの愛の物語を作っていこうね」

真っ直ぐに純粋な、歪んだ愛。



それを何処かで嬉しいと思っている私自身。

そして私は今日もまた、彼の理想のヒロインへと堕ちていくのだった。

【END】

